

キャリア教育の活性化にむけて求められる視角

筑波大学大学院人間総合科学研究科 助教授 藤田晃之

1. 今日進む教育改革の特質とキャリア教育

キーワードとしての多様化：制度・仕組みとしての多様化 = 外から見える多様化

例 高校改革における多様化 / 大学改革における多様化

カリキュラム改革としての多様化 = 学校内での多様化

例 学習指導要領

「多様化」が所期の目的を達成する上での重要な条件

= 多様な選択肢を将来に生かす力の育成

緊急対策としての側面を強く有する今日のキャリア教育推進施策

2. 不可欠な2つの力：内に向かう力、外に向かう力

2-1. 「内に向かう力 (= 自己理解力)」の育成のために

査定用具が描きだす「私」

まんじりともせず自己に向き合うこと

人とかかわること、社会とかかわることによって発見・形成される「私」と将来展望

2-2. 「外に向かう力 (= 社会認識力)」の育成のために

「子どもの世界から断絶された知」の伝達を超えて

小さなヒシヤクしかもたない者はヒシヤク 1杯分の水しか汲めない

プロアクティブなガイダンスの重要性 「3」へ

職場での学習：「大過なく実施すること」の次に来るべきものとは 「4」へ

3. 成否の鍵を握るプロアクティブな発達支援

学校教育の本質 = プロアクティブな働きかけ

動機づけのための連綿たる試み

新たな視点・視野獲得に向けた支援の蓄積

キャリア教育においても求められる同様の働きかけ

子ども側の関心の弱さ・視野の狭さは不活発な実践の理由になるか？

4. 職場見学・職場体験・インターンシップをめぐって(推進施策の中核をどう生かすか)

小学校での職場見学、中学校での職場体験、高校でのインターンシップ

それぞれの「ねらい」の体系化はなされているか

アメリカにおける体系化から示唆されるもの

体験的学習をどう評価するか / その評価軸を学校と地域(企業・職場)でどう共有するか

5. 「夢」「将来展望」をどう位置づけるか

次の学校段階への「先送り」ではなく「申し送り」を

切り拓く自らのキャリア：展望(計画)通りに進むはずのない将来

= だから計画そのものが無意味である、ということにはけっしてならない

市井のわたしたちは、それでもどっこい生きている

= R.W.エマソンの言葉とされる「人生における成功」が示すもの